
黒のクローク

スタモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒のクローク

【Nコード】

N1069C

【作者名】

スタモン

【あらすじ】

嫉妬深く、傲慢、欲深く、嘘つき、そんな真つ黒な悪魔のよ
うな女性に着いて旅をする純粋な少年の話

始まりの前

「ねーねー、今日は何を教えてくださいの？」

ちよつと長めの、耳が隠れるほどの髪の毛の可愛らしい顔をした男の子が、好奇心溢れる目をして目の前に座る老人を見つめている。

男の子からの熱い視線を受けて、どこか楽しげな老人。

しかしその姿は、手入れしてないボサボサの髪、身に羽織った薄黒い衣、猫背ぎみにだらし無く座り、まるで浮浪者のような格好をしている。

だが男の子はそんな事は気にせず老人の横に座り、老人の顔を覗き込む。

「そうだな、今日は神様の話をしよあげよう」

老人が笑顔でそう言うと、男の子は頬をプクツと膨らませる。

「それはもう聞いた！」

「……じゃあ、レイア戦争の英雄の話を」

「それも聞いた！」

「じゃあ、じゃあ、不老不死になった錬金術師の話を……！」

髪をいじりながら必死になっている老人を、男の子はジトツとした目で見る。

「……さすがのワシも、一年間毎日来られたらもう品切れだよ」

老人は大きく息を吐き、力なく首を前に垂れる。

「じゃあ、再入荷してきてよー」

容赦ない男の子の言葉に老人は苦笑いで答える。

そんな姿を見て、男の子はつまらなそうな顔をして後ろに倒れる。

「今日のおじさんはつまらないー」

「そんなこと言われてもなあ……」

力ない言葉に諦めがついたのか、男の子はゆっくりと目を閉じる。老人も空を見上げ、2人の間に沈黙が流れた。

「真実を話してあげよう」

不意にそう言った老人は、空を見上げたまま、ポリポリと頬をかいている。

「真実って……なにの？」

起き上がり首を傾げる男の子に、老人は軽く笑いかける。

「この世界の真実だよ」

それを聞いた男の子は首を傾げたまま難しい表情になる。

老人はそれを見て再び軽く笑い、羽織っていた薄黒い衣を男の子に掛ける。

「君は私の言葉を信じているかい？」

「うん、信じているよ！」

男の子は掛けられた衣をばたつかせ、元気いっぱい即答する。

老人はそんな男の子の頭を優しく撫でてやる。

しかし、その表情はどこか悲しげだった。

「2年後、君の前には大きな鎌のような武器を持った女性が現れる。

その人に着いていくがいい」

その唐突もない発言に、男の子はキョトンとして老人を見つめる。

老人が男の子と目を合わせると、男の子の目にじんわりと涙がにじんでくる。

「……お別れ？」

そう言うと男の子は目を反らし、掛けられた衣で涙をぬぐう。

老人も正面を向き、悲しげに口を開く。

「その女性は、欲深く、傲慢で、嘘つきで、嫉妬深い。だけど、今の君に無い物を持っている」

男の子は目を細め、両手で衣を力いっぱい握りしめている、その体は小刻みに震えている。

「真実は、教えてくれないの？」

口を開くことに溢れる涙を拭いながら男の子はそう言う。

「ワシは半分しか教えられなかった、もう半分は彼女からしか学べ

ない」

老人はそう言うと立ち上がり、尻を手で軽く払いゆっくりと歩き始める。

「真実は君が全てを学んだときに教えよう」

その言葉を聞いた男の子はうずくまり、泣きじゃくってしまふ。

老人は少し下を向き、男の子を見ないようにフラフラと遠ざかっていく。

「またね……」

男の子は、離れていく老人に小さく手を振った。

始まりの前（後書き）

初小説です。

自信ないです。

感想下さい。

始め

周りを森に囲まれた、民家が10軒ほど立ち並ぶ集落。
人々は悠悠々自適にのんびり暮らし、家畜達も自由に集落の中を散歩している。

そして今、そんな場所に似合わない女性が1人。
おそらく20代前半、整った顔立ちをした、腰まである艶やかな黒髪が印象的な女性。

目鼻立ちは鋭く、その凜とした面持ちと纏っている白のドレスからは、高貴な雰囲気を感じらる。

身長は170cmほどあり、無駄のないスリムな体型をしている。
そして背中には、自分の背丈ほどある大きな鎌のようなものが背負われていた。

それは日の光に当てられると、薄紅色に輝く。
その鎌がカタカタと揺れると、妖艶な女性の声がある。

「なにやってるのよ、さっさと声かけなさいよ」

「うるさい、アゼリア、邪魔だから黙っててよ」

低めの声で一喝する。

しかし、アゼリアと呼ばれた鎌がすぐに意地悪く言い返す。

「あれれ、道に迷ったのは誰だったわけ？」

「……うるさい」

冷淡だった彼女の顔がほんのりと赤らむ。

すると偶然にも彼女の前に中年の男性が通り掛かる。

彼に気付いた途端、彼女は表情を最高級の笑顔に一転させ、ゆっくりと近づいていく。

「こんにちは」

彼女の声は、アゼリアと話していた時よりも高く、女らしい声になっていた。

「……」

話し掛けられた男性は振り返り彼女の姿を見ると、顔を赤くして止まってしまふ。

しかし、彼女は表情を変えることなく話を続ける。

「すいません、ここから城下町までの道を教えて欲しいんですが……大丈夫ですか？」

「あ、その、つい見とれちゃって」

顔を赤らめながら謝りつつも、彼女の爪先から全身を舐め回すように見る。

「どうしました？」

「いえ、綺麗だなと……」

目線が鎌の方に向くと、彼はそのまま固まってしまふ。

彼の赤らんでいた顔がだんだん青ざめていく。

「ああ、これはあの……」

固まっている彼に、女性は冷静に弁明しようとする。

しかし、そんな彼女の声は彼に届いていない。ただ震え、一歩また一歩と彼女から離れていく。

「し、死神……」

彼はそう言つと、悲鳴を上げて逃げ出してしまふ。

そしてこの場には、彼女と散歩している家畜達しかいなくなった。

「……ちつ、使えない」

舌打ちをすると、元の冷淡な表情に戻る。

「ていうか、私を見て逃げ出すってどういう事よ!？」

一方のアゼリアは激しく怒り、女性の背中で大きく震えている。

そのせいで背負っている彼女までもが、少しふらついていた。

だが、ふらつきながらも彼女は、何事も無いような冷静な表情で呟く。

「私が話し掛けてあげたのに、アゼリアを見たくらいで逃げ出すなんて……」

表に出さないものの、本当は相当腹が立っているようだ。

「絶対に殺す」

彼女はボソツとそう言う。

そして、激しく怒り、震えているアゼリアを無理矢理つかみ取った。

つかまれた途端にアゼリアは震える事を止め、大人しくなる。

彼女はアゼリアを軽々と構えると、男性が逃げた方へとユラユラと歩き出す。

その姿はまるで本物の死神のようだった。

そんな完全にキレてしまっている彼女に、黒い衣を羽織った男の子が無邪気に近づいていく。

その男の子は肩まである長い髪を後ろで結わい、可愛らしい顔をしていた。

「ねえねえ、その鎌はお姉ちゃんのこと？」

何のためらいも無く、彼女の側に寄る。

彼女は男の子を片目で見ると、表情を変えずに口を開く。

「黙れ」

そう言うとき彼女はアゼリアを軽く振るう。

風を切る音と共に、男の子が後ろに倒れる。

倒れた男の子の体には、肩から腰にかけて大きな傷口がつけられていた。

その傷口からは血が止めどなく溢れ出す。

「かわいいぞ〜」

大人しかつたアゼリアが笑い声混じりに言う。

しかし、彼女はそんなこと気にする様子も事なく再び歩き始めた。すると残された男の子の体が青白く光る。

「……痛いよ、お姉ちゃん」

男の子は弱々しく立ち上がる。

血は止まり、傷口は完全に閉じていた。

女性と男の子と鎌

立ち上がった男の子はふらつきながら女性の後を着いて来ている。彼女はそれに気付くと、意地悪く歩く速度を早めた。

「男の子と彼女の距離は段々と離れていく。」

しかし、それでも男の子は諦めずに彼女に着いて行く。

「あの子と知り合いなの？」

アゼリアが彼女にそう尋ねた。

すると、彼女は立ち止まり、後ろを歩いている男の子の方を向く。すると、10mくらい後ろに血みどろの男の子がゆっくりと歩いていた。

男の子は彼女が止まった事に気付くと歩く速度を速めて、嬉しそうに駆け寄っていく。

しかし、彼女は再び無表情で前を向き、速足で歩き始める。

「違う、と思う」

彼女は少し自信が無さそうだった。

アゼリアはそんな彼女を軽く笑う。

「あの子魔法使えるっばいし、親の敵討ちとかじゃないの？」

「……あいつが？」

そう言うと彼女は後ろを向く。

再び後ろを向いた彼女に、男の子は満面の笑みを浮かべて手を振っている。

その笑顔からは殺意や怨みはまるで感じられない。

彼女はそんな男の子を見て少し呆れている。

「人を切ってあんな反応されたの初めてだ……」

それを聞いたアゼリアはカタカタと揺れ、大きな声で笑う。

笑っているアゼリアを見て彼、女は大きくため息を付いている。

そのまま彼女はうつむき何かを考えると、突然180度後ろを向いて男の子の方へと歩いていく。

「カスを殺すのは後だ」

彼女はそうアゼリアに言う。

そして、歩く速度を一層速めて男の子に近づいていく。

彼女が近寄ってきたのに気付くと男の子も駆け足になる。

そして、二人の距離があと1mくらいになると彼女はその場に止まる。

「止まれ！」

彼女がそう叫ぶと、男の子は驚いた様子でその場に止まってしま
う。

だが、すぐにニツコリ笑い彼女を見つめる。

彼女はそんな男の子を冷たい瞳で見下し、ゆっくりと口を開く。

「何のようだ？」

彼女は冷酷な表情で、脅迫しているかのような言い方をする。

しかし、男の子はそんなこと気にもしていないようだ。

男の子は嬉しそうに口を開く。

「お姉ちゃんも、その鎌も美人さんだね！」

「……耳は聞こえるよな？」

男の子の的外れな返答に、彼女の冷酷な表情が崩れてただ呆れて
いる。

「でも、目は良いみたいね」

男の子に褒められて、アゼリアは上機嫌になっていた。

アゼリアが嬉しそうにユラユラと揺れると、刃が妖艶に輝く。

呆れていた彼女はそんなアゼリアを見ると、一瞬不機嫌な顔つき
になった。

しかし、アゼリアはそんなことには気付きもせず話しを続ける。

「あんたよく見ると顔も悪くないし、センスも良いみたいだし、私
の従僕にしてあげてもいいわよ」

アゼリアは高飛車な感じで言う。

「で、私に何のようだ？」

「あの……」

「ちょっと、無視!？」

2人ともアゼリアの話は完全に無視していた。

男の子はアゼリアの声に反応するが、彼女にいたっては反応すらしない。

彼女はただ無表情に男の子を見ている。

「気にせずに続ける」

「気にして、私を気にして!」

アゼリアが必死になって2人に訴えかける。

それを見た男の子は少し戸惑う。

しかし、そんな男の子を見た彼女が真面目な顔で口を開く。

「アゼリアは調子に乗ると、凄いウザイんだ」

男の子の動きが止まる。

「ごめんなさい、ウザイのは嫌です」

男の子は謝り、深々と頭を下げる。

それを見た彼女は軽く頷く。

「わかってくれたらいいんだ」

「私は凄い傷付いたけどね……」

アゼリアの声は悲し気だった。

女性と男の子と鎌（後書き）

題名考えるのが難しい。

あと、このページの管理の仕方がイマイチ分からない。

そして、文章考えるのも大変だ。

あ、できれば感覚ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1069c/>

黒のクローク

2010年10月9日01時15分発行